

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷八十第

行發日一月四年三十正大

故戸田海市博士肖像并に哀詞

論叢

虞夏書に見たる政治經濟思想はれたる 法學博士 田島 錦治

階級の動學的考察 文學博士 高田 保馬

獨逸最近の社會學論 文學博士 米田庄太郎

植民地の經濟政策に就きて 法學博士 山本美越乃

時論

不景氣と租稅 法學博士 神戸 正雄

說苑

一子相續制度に就いて 經濟學士 八木芳之助

客觀的勞賃論の史的發展 經濟學士 森 耕二郎

雜錄

戸田博士逝く ○戸田海市君の追懷(西田幾太郎) ○戸田博士を憶ひ

て(福田徳三) ○戸田君の追懷(神戸正雄) ○追憶の斷片(河上肇) ○戸田

博士と私(河田嗣郎) ○戸田先生を憶ふ(小島昌太郎) ○戸田博士と大阪

市労働調査事業(關 二)

戸田博士を憶ひて

福田 德三

戸田博士の訃報は、私に取つては待設けられた案外であつた。普通の人なら戸田博士の様に數切れないほどの病氣を身に持つて居ては、疾くの昔に此世を去つてある可きである。博士は慥かに不二身であつた、而して其不二身は、生理的でなく心理的であつた、言換れば、博士の驚く可き克己と節制とが、博士をして、非凡なる不二身たらしめたのであらう。

學問上に於ける博士の最大長所、最特徴も亦此の不二身と云ふ點にあつたのではあるまいか。博士位現在の經濟學者中、善く平均の取れた物の考へ方をする人はないと思ふ、山崎博士や堀江博士や河津博士も、萬遍なく思索し、考慮して、偏したことを言はないように勉めて居るように見へるが、然し善く平均の取れた、換言すれば、學問した常識の最も圓滿に發達した點

に於ては、戸田博士は、日本經濟學者の筆頭に立つ人と云つてよからうと思ふ。博士とて時には偏したことも言つて見たかつたらうし、激した言を吐いても見たかつたらう、然し類稀なる博士の克己心と節制性とは、博士をして、餘程思ひ切つたことを言はしめるときでも、猶バランスを善く保たせてあつた。博士の此の克己と節制とは、凡人に忍び難き肉體の疾苦に堪へさせたと同時に、精神的の不具性に打克たしめ、博士をして、其弱き肉體を以てしては、實に案外なるほどの長壽——五十四歳は博士に取つては確かに長壽であつた——を享受せしめ、學者としては、匹儔なき程の平均の善く取れた議論家たらしめたものと思ふ。

博士のあらゆる立論の一特徴は、一の『ソツ』のないと云ふ事である。私は同人諸君の知らるゝ通り、掲げ足取りが好きと云ふ悪癖がある、實は好きと云ふよりも、其れが私に取つて、一の先天性であるので、同人の文章を讀んで、一ヶ所でも、不満足な所を見ると、とても黙つて

居られないのである。其れ程私は不具畸形な神經質なのである。然るに戸田博士の文章には、其の貨幣問題―殊に紙幣―に關した一文を除いては、私は未だ一度も、黙つて居られないと感ぜた箇所を發見したことはない。尤も最近一兩年間、經濟演習の記録として論叢にのせられたものは、私は之を讀む苦痛に堪へられないから、餘り讀まなかつた、又讀んでも、其は全く別物として取扱つた。私は病中の博士が猶其學者たる務を廢せず、學生の爲めに演習の務を執り、時事の問題等に就て、苦慮せられた結果を論叢にのせしめらるゝを見て、唯苦痛を感ずるのみで他の諸君の文を讀むような快感を覺ゆることは、逆も出來なかつたのである。故に此等に就ては、少しも論ずるつもりは持たぬ。少くも三四年前途の博士の公けにせられたものに就ては、私は未だ一の『ソツ』を見出すことが出來なかつたことを、茲に白狀したいと思ふのである。

博士は、或意味では、リカルド型の思索家で

あつた。余り多く他人の書いたもの――日本人の其れのみならず、西洋人の書いたものも――を讀まず、讀んでも、其れに囚はれることなく、唯自分の頭腦だけを頼りとして、物事を考へ詰められたように思ふ。此點に於て、私は博士をリカルド型と呼んで差支はあるまいと思ふ。併し其れと同時に、博士は、リカルドの様なアブストルーズ、シンカーでは決してなかつた。書齋の中で、否多くは病床の上で思索せられた人としては、實に珍らしい程、常識的に物事を考られた。最も抽象的な議論をしつゝある間にも、博士から常識が離れ去つた瞬間は一もなかつたように思ふ。但し其常識と云ふのは、普通云ふ常識とは、必ずしも同一ではない。普通云ふ常識とは、物事を其最終點迄考へ詰める勞を厭つた中間物を指して云ふのである。常識に訴へると彼等が言ふのは、實は『善い加減にして置け』と云ふことを體裁よく言つたことである。此の意味の常識に於ては、世渡りの上手な人例へば鎌田榮吉氏の如きは最も發達した人

であらう。戸田博士に就て私が常識と云ふのは、其れとは違ふ、博士のは、最も徹底した物の考へ方を爲す上に於いての常識である、物事をつきつめて考へ通し乍ら、而も偏智的、偏論理的にならない其の常識である。鎌田流の常識を有つ人は、今の世に箒ではく程澤山ある、否、あり過ぎて、我々は迷惑して居るのである、然し其を持つ人々に取つては、其の意味の常識ほど、役に立つものはない、何となれば、其れは世渡りの最上方便であるから。之れに反し、戸田流の常識は、世之を有つ人極めて少ないのである。而して、其れは、學者として寧ろ損な特性であらうと思ふ。

戸田博士に似た外國の學者としては、私は倫理學者のトーマス・ヒル・グリーンを憶はずには居られないのである。人と爲りも似て居るように思ふが、議論の立て方も可なり類似して居るように思ふ。グリーンが其眞價ほどは、當代に重せられなかつたは、其の特徴の爲めであつたらうと思ふ。戸田博士が病氣でなく、更らに

十年、二十年の壽を保たれて居ても、博士は當代の流行兒とならないことは、グリーンの如くであつたのではあるまいかと思ふ。其れと共に、死後、其眞價が見出され、今日迄もグリーン時代とも云ふ可きものが繼續して居る如く、戸田流の釣合の取れた經濟論は、何時かは、其の眞價が認められるときがあらうと思ふ。然し其の爲めには、博士五十四年は餘りに短きに過ぎた、残念と云へば、此一點である。併しグリーン終生の著作は、手頃なオクタヴ唯三冊であることを思へば、戸田博士の述作必すしも、少きを憾む可きではない、唯だ博士の研究に供せられた問題が、一晩年に於いては、一割合に範圍が限られて居たことを憾めば憾む丈けのことである。日本人は没我的云々時代の調子で、現在の諸問題を縦横に博士に取扱つて貰たかつたと思望するものは、恐らく私一人ではあるまいかと思ふ。殊に私一人としては、河上博士と私との時々々の論争に、他の唯人のよりも、博士の高處からの横鎗を希つたこと一再にして止まらないの

である。而も今や之を得可き望は永久に絶へた。此點に於て、私は痛恨禁せざるものである。

最後に一言を加へたい。博士の健康が未だ著しく衰へなかつた頃の京大經濟學部は、實に經濟學者のバラダイスであつた。其の經濟學研究會では、火の出るような討論が鬨はされつゝ、個人的の親睦は實に理想的であつた。河上博士のダタツ廣ひ寓居に一夜泊めて頂いて、翌日は東山の御寺見物をしたり、小川博士かに連れられて、戸田博士を百萬遍の御宅に訪ねて閑談したりしたことは、私の一生——而も當時は慶應義塾の冷飯として東京では殆んど身の措き處のなかつた私に取つては——決して忘るゝことの出来ない愉快な時代であつたと共に、經濟學研究會の討論では、伏兵各所から起つて、厚顔な私も拙からす面喰ひはしたが、然し自分が可なり永い間考へて居た問題に就いて、思も設けぬ突つ込んだ質問を受けたことは、會心此上もないことであつた。此の獨得の京都學風の達成には、戸田博士の釣合の取れた學風が、可なり

大なる影響を有して居たことと思ふ。換言すれば、戸田君は、獨り其學問を以つてのみならず、其の人格を以て、京都經濟學のバイオニアであると共に、之を取圍む人々を、學究的バラダイスの住人たらしめた一恩人であると思ふ。戸田君を永久に京大に活かして置く道は、此のバラダイスを維持するより善きはあるまい。同人諸君以て如何となす。(十三、三、十三、認む)